陳舜臣

小說

十八史略 5

小説

八犬史略 5

陳舜臣

毎日新聞社

小説十八史略5　定価九八〇円

昭和五十七年七月三十日　第一刷
昭和五十八年九月十日　第四刷

著者　陳舜臣
編集人　川合多喜夫
発行人　関根望
発行所　毎日新聞社
〒一〇〇　東京都千代田区一ッ橋
〒五三〇　大阪市北区堂島
〒八〇二　北九州市小倉北区紺屋町
〒四五〇　名古屋市中村区名駅

印刷　中央精版　製本　大口製本

© Syunshin Chin *Printed in Japan* 1982

目次

Ⅰ

天下大乱　7

桃李の子　12

次男坊　18

いざ、長安へ　23

われ長安に達す　29

呉公台下に悲風多し　34

緑影、一千三百里　40

野望は山中に消えた　46

またもや皇帝　51

Ⅱ

黄河の東　58

砂塵作戦　63
濁流きたる　69
骨肉の暗闘　74
玄武門の凱歌　80
貞観(じょうがん)のはじまり　85
仏法再興　91
高昌国滅亡　96
栄光の帰還　102

Ⅲ

遠征より帰る　108
太宗、世を去る　113
貞観の遺産　119
美女還俗　124

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

抵抗する者なし　130
東方の戦雲　135
血戦白村江　141
新しい人材　146
太子たちの悲劇　152
浄光天女即位　158
女帝晩年　163
唐王朝復興　169
Ⅳ
颯爽たり李隆基　175
二つの譲位　180
太平公主没落　186
暮れ行く開元　192

十六宅の女 197
春寒くして浴を賜う 203
寵妃権臣 208
昇進の道 214
海を渡る人たち 220

V

長安往還 226
安禄山謀反 231
両将軍斬刑 237
玄宗、長安を去る 242
六軍発せず 248
騒乱九年 254

装幀　原田維夫

小説 十八史略 5

I

天下大乱

杯を唇のそばに近づけながら、李淵はじっと次男の世民の顔をみつめた。

「いやにおちついたこどもじゃな。……」

すでに酔っている。

だが、その目は濁りながらも、ときにキラと光る。

父の呟きが、李世民の耳にはいったかどうか、その場にいた人たちにはわからなかった。少年李世民は、まったく表情を変えなかったからである。

「父上の酒は、ちかごろちと過ぎるようだが。……そなたはどうおもう？」

宴のあとで、兄の李建成からそう訊かれたときも、李世民は無表情のままであった。

「仕方がございますまい」

彼はそう答えただけであった。

隋の煬帝の世である。——西暦でかぞえると、七世紀にはいったばかりの時期にあたっていた。

李世民は隋の開皇十八年（五九八）に生まれた。それは隋の文帝が、高句麗遠征に失敗した年である。二年後に煬帝が即位したが、むろん李世民はまだ物心がついていなかった。日本から小野妹子という人物が、使節として来朝したのは、李世民が十歳のときであった。そのとき、彼は父や兄に、いろんなことを質問した。

——日本という国は、隋とおなじことばを用いるのですか？

——では、国書に書かれた文字は？

——その国から隋まで、どれほどはなれているのですか？どの道を通ってきたのですか？　その風俗は？

むしろふつうの子供よりは、好奇心が強かったのである。ところが、そのころから、しだいに口数の少ない少年になった。

（いやにおちつき払った、こどもらしくないこどもじゃ。……）

父の李淵はそうおもった。

長男の李建成は、うてば響くような、反応のはやい少年であった。いや、弟の李世民が少年になったころ、兄の李建成は青年と呼ばれる年頃になっている。二人は九歳も年がはなれていた。

あるとき、泥酔した李淵が、

「おまえ、うれしいときは笑え。……悲しいときは泣け。

……それがふつうのこどもじゃ。なんだ、いつもおなじ顔をして。……まるでこどもらしくない。……」

と言ったのに、李世民は、

「私はふつうのこどもではありません。……これは父上の真似をしているのでございます」

と答えた。

「なに、わしの真似？」

李淵は絶句した。

李家は北朝の名門である。その祖先は西涼の武昭王であると称していたが、その系譜はさだかではない。李淵の祖父の李虎は、西魏に仕え、隴西郡公に封ぜられた。その出身からいって、西方のにおいを濃厚にもっている。

南北朝時代は一種の貴族社会で、西魏も八柱国、十二将軍の家系が、支配層を形成していたのである。

李虎は八柱国の一人であった。

西魏から北周になっても、李家は名門でありつづけた。

北周にとってかわった楊堅（隋の文帝）は、おなじく十二将軍の家系であった。そのならべ方でもわかるように、柱国の家のほうが、将軍の家よりも格が上であるとされていた。

（皇帝は将軍出身。わしは柱国の出身であるのに。……）

李淵の胸にはそのような不満がわだかまっていた。

じつは彼は隋の煬帝とはいとこにあたる。彼の母親は煬帝の母親（文帝の皇后）と姉妹であった。中国ではこのような関係を表兄弟と表現する。

身内であるから信頼できる。高句麗遠征のときの兵站を担当したのは李淵であった。親戚として信頼して、極秘の仕事をまかせたのだが、それは弱点を握られることでもあろう。隋の煬帝は、どうやら李淵にいささか疑いの目をむけるようになったらしい。

李淵は交際好きであった。このことが、煬帝に疑われる種でもあったのだ。

――地方の有力者と結んでいる。なにかをたくらんでいるのではあるまいか？

このような煬帝の疑念は、李淵にも推察できた。

痛くもない腹をさぐられるのは口惜しいが、そのままにしておいては、どのようなわざわいを招くかしれない。なにしろ命にかかわることなのだ。

野心を抱くような人間ではない。――

煬帝にそう思わせねばならないのである。李淵はそのため、酒色に溺れているようにみせかけることにした。

酒も女も、けっしてきらいではない。素地があるので、酒色に溺れるふりをするのは、難しいことではなかった。

李淵の身辺にも、彼のことをいちいち煬帝に注進する人間がいたであろう。だから、彼はそれが演技であることを、誰にもしらせなかった。

それなのに次男の李世民は、それを見すかしたような口ぶりであった。

父の真似をしている、という。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

喜怒哀楽を、表情にあらわさないのは、なにかをおそれてのことだといわんばかりであった。

なにをおそれるのか？

李淵は唐国公に封ぜられていた。西魏から北周になって、李淵の祖父李虎はすでに死んでいたが、唐国公を追封されていたのである。李淵の父の李昞がそれをついだが、早く死んだ。だから、李淵は七歳のとき、すでに唐国公となったのである。

これは長男の建成に譲るべき地位であった。

次男の世民は、「唐国公」の椅子に野心がないことを示すために、喜怒哀楽に反応しない、鈍い人間を装おうとしているのだろうか？

李淵はいやな気がした。

（おれが死んだあと、お家騒動がおこらなければよいが。……）

見当はずれであった。

この少年は、唐国公などを狙っていたのではない。

李世民の志は「天下」にあった。

天下は乱れていた。

隋の煬帝は統治能力を喪失していたのである。皇帝は威光をもって天下を治める、というのが彼の考えであった。けれども、煬帝のいう威光とは、「虚栄」のことにほかならなかった。

正月十五日の夜、洛陽城の端門街に、ひと晩じゅう煌々とあかりをつけ、さまざまな催し物がおこなわれた。サーカスもあれば奇術もあった。音楽は十キロもはなれたところでもきこえたという。

豊都（洛陽城内の東の市場）では、大交易会がひらかれ、諸外国の客が集められた。野菜を売っているじいさんが、竜須席という上等の敷物に坐っている。もちろん、これは演出であった。

――下層の物売りでも竜須席に坐っている。隋の豊かさはたいへんなものだ。

と、外国人に思わせるためだった。

飲食店は無料であった。

――我が国は裕福なので、飲食の料金は取らないのだ……。

樹木には絹が巻きつけられている。絹がありあまっている。……

いくら外国人でも、洛陽にやって来るまでに、各地の実状をその目で見ている。ろくに衣服も身につけていない貧民がいたるところにいたのだ。このような演出にだまされたりはしない。

だが、煬帝はこのような演出を命じたのである。

――どうだ、恐れ入ったか。……

そう思っているのは皇帝だけで、豊都の大交易会に招かれた西域の人たちも、みなかげで舌を出していたのだ。

李世民が十四歳のとき、煬帝は高句麗に遠征軍を出し、み

ずから遼東まで行ったが、勝利をおさめることができなかった。

翌年、煬帝は再び親征した。

遠征失敗のままでは、皇帝の面子がないとおもったのである。

虚栄のための動員であった。

厭戦気分が全国にみなぎったのはいうまでもない。

このとき、楊玄感が叛旗をひるがえした。

楊玄感の父の楊素は、隋の建国の元勲であった。そればかりか、皇太子を廃して、煬帝を帝位に即けることにも功労があった。隋の建国も、煬帝の即位も、みな自分の力によるという気持があったせいか、驕慢になり、煬帝にもうとんじられるようになったのである。晩年は、

——皇帝にこんなにきらわれるなら、死んだほうがましだ。

と言いながら、まもなく死んだ。

世間では、煬帝に毒殺されたという噂もあった。

楊玄感は父の死に疑いを抱いていた。煬帝がこの功臣の病気を心配して、名医を派遣したが、病状はそれから悪化したのである。

煬帝の第二次高句麗親征のとき、楊玄感は河南の黎陽（洛陽の東）で、兵糧を前線へ送る仕事についていた。そこへ、彼の少年時代からの親友である李密がやって来て、

——あの男を困らせてやれ。

と言った。

あの男とは、遼東城を攻めていた煬帝のことである。

南方から運河で送られてきた兵糧は、黎陽で積みかえ、涿郡（北京の近辺）に通じる別の運河で東北に送られた。その転送を遅らせたり、停めたりしたのである。

李密は西魏の柱国の一人であった李弼の孫である。この李密も、

（柱国である我が家のほうが、将軍であった隋の皇室より上だ）

とおもっていた。それが態度にもあらわれるのだろう。煬帝は、

——李密は目つきが悪い。やめさせろ。

と、宿衛官であった李密を解任したのである。

李密はいつかこの恨みをはらしてやろう、とおもっていた。親友の楊玄感を訪ねたのもそのためだった。

楊玄感も父のことで、煬帝に恨みをもっていた。

困らせるだけでは気がすまない。二人はやがて反乱を謀議したのである。

三策ある。

と、李密は言った。

第一策は、ただちに兵を東北にむけ、遼東城を攻めている煬帝の背後を襲うこと。

第二策は、西のかた、国都長安を攻撃すること。

第三策は、近くの洛陽を攻めること。

第一策が上策、第二策が中策、第三策が下策である、と李密は前二策のいずれかをえらぶことをすすめた。

ところが、楊玄感は下策といわれた洛陽攻めをえらんだ。

高句麗遠征軍の幹部は、その家族を洛陽に残している。洛陽を攻めたなら、遠征軍が動揺するだろうと考えたのである。だが、そのほかにも、

（おれが皇帝となったとき、李密に元勲面をされたくない）

という気持もあったのだ。李密が上策として推した策を採用すると、のちのちまで、李密の手柄とされる。……

けれども、やはり洛陽攻めは下策であった。洛陽の守りは堅く、遠征軍は家族のいる洛陽危うしときくと、急いでとって返し反乱軍の背後に襲いかかった。

侵略戦争には戦意は燃えないが、家族を救うためなら、将兵は必死になって戦う。

楊玄感の反乱は失敗する。洛陽をあきらめて、長安を攻めようとしたが、ときすでに遅く、隋軍は追いついた。楊玄感は弟と刺し違えて死に、李密は捕えられた。

だが、李密は洛陽へ送られる途中、脱走に成功したのである。

大業九年（六一三）、八月のことであった。

楊玄感の反乱は平定されたが、おなじ年、江南では朱燮、管崇たちが反乱をおこし、十万の衆を集めた。

東海では彭孝才が数万の衆を集めて、造反に起ちあがった。

浙江の劉元進も数万の造反軍をあつめ、江南の朱・管たちと兵をあわせた。

煬帝は西域出身の王世充を派遣して、この造反連合軍を鎮圧した。

だが、東都に呂明星、清河に張金称、扶風に唐弼、彭城に張大虎、延安に劉迦論と、各地に反乱が起こった。

末法の世である。

そんなときに弥勒菩薩があらわれて、衆生を救いたまう。

――

仏教信者のあいだに、そんな信仰があった。

――われこそは弥勒菩薩なるぞ！

と自称する者もあらわれた。唐県の宋子賢、扶風県の向海明といった連中である。

煬帝はまだ懲りない。二度も高句麗遠征に失敗して、見栄っ張りの彼は、名誉回復のことばかり考えていた。そして、第三次遠征に踏み切った。

高句麗も三たび攻撃を受け、さすがに疲れて、降伏を申しいれた。だが、本心から降伏しようとしたのではない。時間を稼ぐために一応、降伏を表明したにすぎなかった。

煬帝は面目を保つことができて大いによろこんだ。けれども、遠征軍がひきあげる途中、あろうことか皇帝の行列が、楊公卿という造反軍に襲われ、皇帝の名馬四十二匹が奪われるという事件があった。

汲郡の王徳仁、斉郡の左孝友、上谷の王須拔、離石の劉苗

王、長白山から出てきた孟譲など、造反軍の頭目はかぞえきれないほどである。

天下は大いに乱れた。

李世民は少年から青年に成長するあいだ、この天下大乱をじっと見ていた。

父の李淵は、煬帝の猜疑心をおそれて、ひたすら酒色に溺れるふりをしていた。

（わしは大志を抱いている。めざすは天下だ。……時がくるまで、本心をかくさねばならない。……）

李世民は、なにを考えているかわからない人間、という仮面をかぶった。

演技をしていることにかけては、李世民は父とおなじであった。だから、真似ている、と言ったのだ。

だが、志はちがっていた。

李世民は、大きく息を吸った。

天下大乱のにおいが、はらわたにまでしみこむ気がした。

桃李の子

安伽陀という方士がいた。

不老長寿にあこがれる歴代の帝王は、しばしばあやしげな術を使うと称する人物を、近づけたものである。方術の士、あるいは方士という。

煬帝の信任を得ていた安伽陀は、

——桃李の子、天子たらん。

という予言があると述べた。

「李姓の者を、ぜんぶ殺さなければ、隋の王朝は安泰ではありませんぞ」

世の中には、とんでもないことを口走る人物がいるものだ。

このような寄生虫的な人間は、じつは主人の気持に迎合しようとするのがつねである。方士の安伽陀は、煬帝が建国の元勲李穆一族の勢力が強いのを、こころよくおもっていないことを知っていた。

李穆はすでに故人であったが、一族の李渾、李敏が実力をもっている。猜疑心のかたまりであった煬帝は、楊玄感の反乱のあと、その傾向がますますひどくなった。病的なほど人を疑ったのである。

主人が李一族をうとましくおもっていることを知って、人間の滓のような安伽陀が、李姓の人間を殺せと進言した。

李姓の人間は多い。それをぜんぶ殺し尽せるものではない。

方士だけではなく、廷臣のなかにも、皇帝におもねる者がすくなくなかった。宇文述がひそかに工作して、

——李渾に反意あり。

と、煬帝に告げたのである。宇文述は高句麗遠征の敗戦の責任があり、その埋め合わせのために、あれこれと煬帝のよ

ろこびそうなことをしたのだ。

ほかに宇文述には私怨もあった。文帝に帝位に即くようにすすめた元勲李穆の死後、公爵（申明公）の爵位の継承が、複雑な問題になったのである。爵位は、とうぜん領地からの「国賦」（税収）を伴う。そのとき、李渾は文帝の側近である宇文述に、

――自分が後嗣になれるように口ぞえしていただきたい。もし爵位をつぐことができたなら、国賦の半ばを差しあげましょう。

と頼んだのである。

宇文述のとりもちもあって、李渾は爵位をつぐことができた。ところが、約束の国賦の半分は、二年だけ渡したが、そのあと知らぬ顔をしていたのである。

（あの男、けしからんやつだ。……）

かねてそう思っていたところ、「桃李の子云々」の予言に、煬帝が神経質になっていることがわかった。それで、李渾を追いおとす工作に力をいれたのである。

右驍衛大将軍になって、いまを時めく李渾とその一族に、謀反の意思などはなかった。宇文述はその証拠づくりに、李渾の甥李敏の妻をうごかした。彼女は煬帝の姉の子だったのである。

「方士安伽陀のことばに、陛下はいたく心痛され、いずれ李渾一族は誅滅されるでしょう。けれども、あなたは陛下にとっては可愛い姪です。李一族の謀反を告発すれば、あなたは助命されます。あなたにはそれ以外に生きる道はありませんよ」

宇文述は李敏の妻にそう説いた。

「そんなふうに申されても、李氏の謀反のことを、わたくしは知りませぬ」

「あなたの命にかかわることです。私の申すとおりお書きなさい。それを陛下にさしあげるのです」

宇文述は告発文を口述したのである。

李敏の妻の告発文によって、李一族の謀反は、証拠あり、とされた。一族の内部からの告発なので、疑いなしと認められたのだ。

こうして、李渾、李敏一族三十二人が誅殺された。李敏の妻は宇文述に欺かれたのである。数ヶ月後、毒薬を賜わり、自殺しなければならなかった。血を分けた姪であっても、このようなときは助からない。煬帝はどうやら心から、

（李渾一族が桃李であったのだ）

と信じていたらしい。宇文述が李敏夫人の密告を持ってきたとき、煬帝は、

「吾が宗社（国家）はほとんど傾きかかった。そなたによって全きを得たのじゃ」

と、涙を流したのである。天子になると予言された「桃李」を誅殺したので、彼はようやく胸をなでおろした。

彼の父の文帝が、洛陽から長安（当時は大興と呼んだ）へ遷都したのは、洪水で洛陽が水に没した夢をみたからであ

る。そんなわけで、李敏の幼名が「洪児」であることを、煬帝も気にしていたところだった。

——桃李も洪児も一掃した。めでたいことじゃ。……

宴会好きの煬帝が、それを祝って、連夜、宴会をひらいているという噂は、たちまち全国にひろがった。

「ばかめ！」

その噂をきいて、唾をはいた者がいた。

楊玄感の乱に荷担し、いったんとらえられたが、護送中にまんまと脱走した李密である。彼は劉智遠と姓名をかえ、潜伏中であった。唾をはいたあと彼は、

「桃李とは、このおれのことだ。李渾や李敏を片づけて安心しているなど、おろかな皇帝じゃな」

と、ひとりごちた。

「桃」は「逃」と同音である。

——天子となるのは、逃亡中の李、すなわちこのおれよ。

……

李密はそう思った。

李密が脱走できたのは、金のおかげである。といって、買収したのでもない。どうせ死刑になる身だから、金を持っていても仕方がないというので、七人の仲間を説いて、有金ぜんぶ、護送の役人に渡したのである。

持ちつけない金を持つと、散財してみたくなるものらしい。護送の役人はみちみちご馳走を食べ、酒を飲んだ。警備はしだいにルーズになる。邯鄲（河北省南部）まで来たとき、機会があって、李密は七人の囚徒とともに遁走したのである。

厳罰主義の時代であった。囚徒に逃げられた護送の役人は、その罪によって殺されるであろう。だから、彼らも逃げてしまった。

いたるところに造反軍団がいるので、受皿にはこと欠かない。隋の厳罰主義は、こんなふうに、謀反人をふやす役目をはたしていたのである。

李密は近くの平原郡の造反団の頭目——政府側の表現では賊帥——の郝孝徳を頼った。だが、郝孝徳はあまり李密を優遇しなかった。

（この造反団はだめだ。頭目に見る目がないのだから）

李密はそこを去った。

彼の志は大きい。

その大志を遂げるためには、組織によらねばならない。一から組織づくりをするのは、たいへんなことである。それよりも、既成の組織がいくらでもあるのだから、そこにもぐりこみ、その組織をうごかすほうがてっとり早い。

乗っ取りを考えたのである。

有望な組織でなければならない。郝孝徳のそれは、李密からみれば烏合の衆にすぎなかった。人数もすくなく、あまり魅力はない。

東郡に翟讓を頭目とする造反団があり、一万余人の衆をあ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.